

プレジデント

# Family

特集

算数が  
大得意になる

プレジデントファミリー 2018

[冬]号

定価980円

10年後のわが子のため、さあ親の出番です!

# 算数が 大得意になる

得点  
急上昇!

思考力  
アップ!

苦手克服!

BOOK in BOOK

1

決定版「頭がよくなる  
ボードゲーム」18

BOOK in BOOK

2

図形「面積・体積」  
完璧ドリル

新教材「分数ものさし」

直前「偏差値10UP」の秘密

名家の教育投資

子供が伸びるお金の使い方



# 小

学生のころの私は文章を書くのが大好きで、作文の宿題が出されると、家に飛んで帰ったものだ。

しかし、今の子供たちのほとんどは作文嫌いなのだという。はたして実情はどうなのだろうか。長年にわたって子供たちの作文指導に力を注いできた日本作文指導協会代表の大川尚志さんに話を聞いた。

大川さんが開口一番問題にしたのは、子供ではなく父母のほうだった。

「わが子の作文が添削されて、赤字だらけになって戻されてくるのを見るのはひどく辛い。そんな指導は受けられません」。こんな苦情を言ってくる親がいたという。

子供たちから学習塾に提出された作文は、誤字脱字ばかりでなく文法の誤りも多い。添削者はそれらを一つひとつ指摘し、より読みやすく豊かな表現になるように赤ペンでアドバイスを記す。

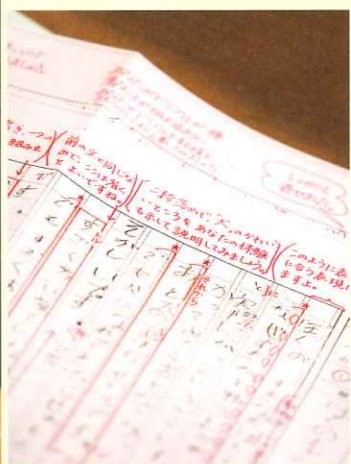
実際に私が見た作文には、添削文が赤字でびっしりと書きこまれていた。これだけ詳しく的確に指導してもらえる子は、実に幸せだと思った。

## 第1回

### 大川尚志さん

# 「書ける子」の親は 何が違うのか

大川尚志  
日本作文指導協会代表。  
1960年、大阪府生まれ。  
現役塾講師。塾現場での指導と並行し、  
日本作文指導協会を設立し、  
35年間にわたり  
作文・小論文の添削指導を行う。  
同協会は、年間20万件以上の  
添削指導をする。



藤原智美  
芥川賞作家。1955年、福岡県生まれ。  
フリーランスのライターを経て、「王を撃て」でデビュー。  
『運転士』で第107回芥川賞受賞。  
『日本の隠れた優秀校』なぜ、「子供部屋」をつくるのかなど  
教育に関するルポも多い。

「ただし子供をまず褒めないといけません。厳しい指摘だけでは作文嫌いになってしまい、書く力を上げることはできなくなります」。子供にとっての褒め言葉は、学習への強い動機づけとなる。ことに、みずから「学びたい」「勉強しなければならぬ」という自立的な意欲が出てくる前の子供にとつては、褒めることが勉強に向かわせる最良の方法である。

大川さんは家庭でも、親が子を「褒める」ことが大切だと説く。

たとえば教科書や作文を音読させて、「その話は面白いな」「この表現はうまいね」などと共感したり、褒めたりすることはとても大切だという。そうした言葉のやりとりが、読み聞かせにも必要ということだ。

大川さん自身、わが子への読み聞かせでは、対話をさしはさみながら行った。たとえば童話の「桃太郎」の場合、「……どんぶらこ、どんぶらこ」と大きな桃が流れてき

ました。さて、ここで問題です。その桃はどれくらい大きかったでしょう。などと、クイズ形式の質問をまじえて、物語への興味をかきたてる工夫をしたそうだ。「読み聞かせは、ふだん聞き慣れた母親より父親がやるほうがいい。子に緊張感が生まれるからです」。高学年になると、たとえば新聞記事を親子で読み合って、たがいに見出しをつけてみるという

「仕掛け」を採り入れるのもいい。かねてから私は、読むことが書く力をつける第一歩になると思っていた。文を書くとき、人はまず頭の中で言葉の「先読み」をする。そして書いたあとは、その文を「後読み」する。推敲はその最終段階である。つまり書くことは「先読み」「後読み」という二つの「読み」にサンドイッチされて、はじめて完結する。

にもかかわらず、それが許せないという親がいるのだ。作文の目的は書く力をつけるためのトレーニングである。その意味では計算問題や漢字の書き取りと同じなのだ。

わが子の作文を「作品」として特別視する親がいるかと思うと、逆に「作文なんかよりも英語が大事」と、軽視する親も少なくない。今、教育現場では書く力が再考され、作文が重視されつつある。その流れに父母の意識が遅れているのかもしれない。

こんな親の姿勢が影響してか、子供にも作文を学習の一環ととらえる厳しさが乏しい。作文添削の講座を受講する児童は、全体の6、7%にすぎないと聞く。これでは書く力は向上しない。わが子に書く機会を与えることは親の大切な務めの一つである。

特に大川さんが強調するのは継続性だ。

「継続して作文にトライする子は、確実に書くスピードが速くなり、加えて表現力も向上します」

ある子は4年生のときに「しかし」「だから」という接続詞がまったく使えず、ほとんどの文頭に会

読み聞かせは、子供がみずから「読むこと」への誘導となり、ゆくゆくは書く力へとつながっていく。読むことの大切さは、大川さんの子育てでも大きなテーマだった。彼の2人の息子は灘高校から東大へ進んだ。彼らが幼い時分から、家の廊下には高さ90cm、幅3mほどの本棚があった。そこに子供向けの本をびっしりと詰めこんだという。さしずめ私設の児童図書館だった。息子ばかりかその友達たちも本を借りにくるほど、みんなで本を読んでいた。

現代の子供にとって書く機会という点、やはりSNSなどのネットが多い。そこで送受信される言葉は十分に推敲された書き言葉ではなく、かぎりなく会話に近い、くだけた表現ばかりだ。日ごろから本に親しみがなく、作文から遠ざかっている子は、書き言葉も会話調になりがちで、長い文章が苦手になる。

大川さんによると、今の子供の書く力は二極化しているという。きちんとした書き言葉を書こうとする子と、会話調の散乱した文体系から抜けきれない子だ。そのどちらにわが子が入るかは、結局は親の姿勢にかかっていると

F